

アブラツノザメ 日本周辺

North Pacific spiny dogfish *Squalus suckleyi*



管理・関係機関

なし

生物学的特性

- 最大体長・体重：雄 93 cm・5.9 kg、雌 115 cm・13.0 kg
- 寿命：60 歳以上
- 性成熟年齢（標準値）：雄 9 歳、雌 18 歳
- 繁殖期・繁殖場：2～4 月（出産期、妊娠期間 20～22 か月）、繁殖場は調査中
- 索餌期・索餌場：調査中
- 食性：魚類、頭足類
- 捕食者：東北地方太平洋岸沖のマダラの胃内容物として出現

利用・用途

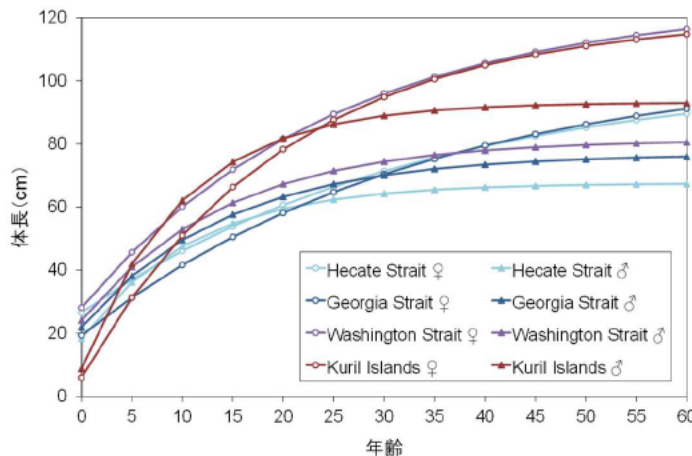
第2次世界大戦前後は、ビタミンAや肝油の原料として高い需要があったが、合成ビタミンAの普及によりアブラツノザメ漁業は衰退した。東北地方では刺身や煮物、照り焼き等で食されるほか、ちくわ等の練り製品原料として利用される。近縁種の *Squalus acanthias* とともに世界で最も利用されるサメとしても知られ、ヨーロッパ諸国では水産資源としての評価が高い。また、近年では肝油や軟骨エキスを健康補助食品の原料としても利用されている。

漁業の特徴

北日本の太平洋側や日本海側では、少なくとも江戸時代から漁獲されていたが、漁獲対象として注目されるようになったのは明治30年代末頃からであり、北海道や青森、秋田、石川県等で当初はマダラ等を対象とした底はえ縄漁船の兼業対象種として漁獲された。その後、昭和初期に機船底びき網で漁獲されるようになった。太平洋戦争後は食糧増産政策に伴い主に機船底びき網により積極的に漁獲され、漁獲量が増加した。現在、本種は主に、以前に比べて本種を主対象とする操業が減少した沖底と本種を主対象とする底はえ縄により漁獲されている。

漁獲の動向

アブラツノザメを多獲していた1952～1955年の平均漁獲量は約4.1万トンに達した。その後、漁獲量は1950～1960年代の合成ビタミンAの普及による国際取引の減少とそれに伴う魚種単価の下落により急激に減少した。1990年以降の我が国周辺におけるアブラツノザメの推定漁獲量は、2,000～4,500トン程度で比較的安定して推移している。



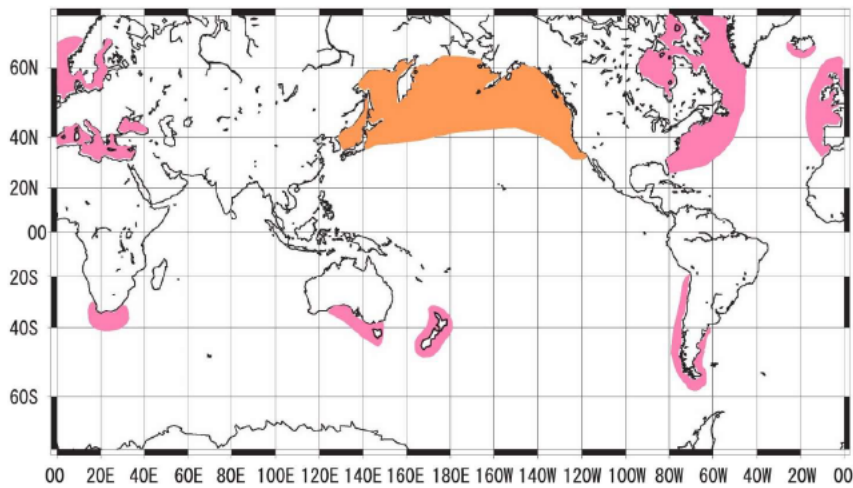
アブラツノザメの雌雄別海域別成長曲線

資源状態

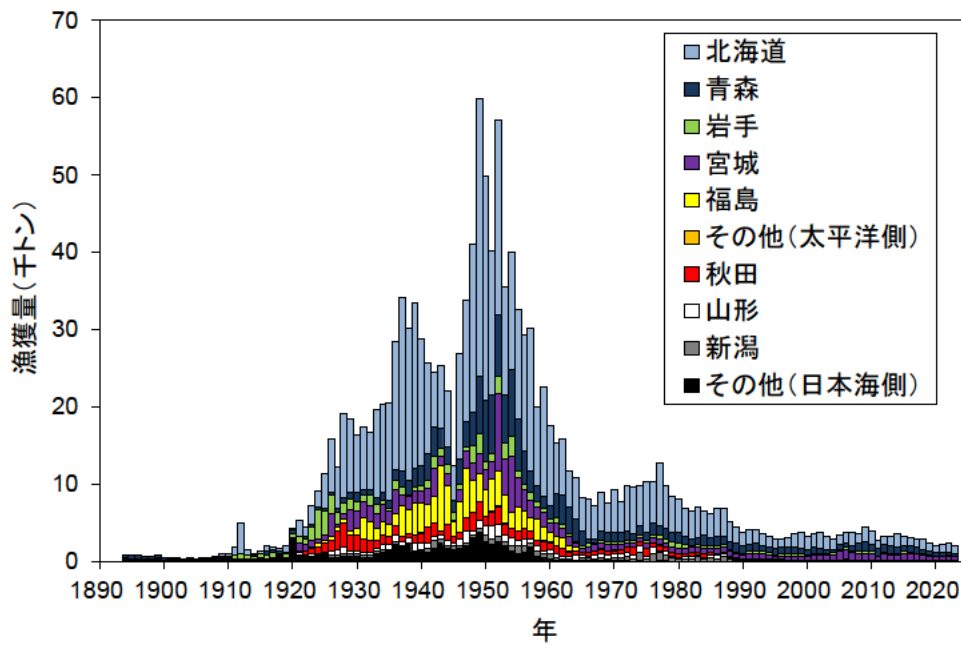
本種について、複数の国・地域が参画する国際的な漁業管理機関による資源評価は実施されていないものの、北太平洋東部では米国やカナダが資源評価を実施しており、それぞれの評価海域において比較的豊度が高く、近年は乱獲状態にないと判断されている。我が国周辺海域に生息するアブラツノザメについては、1972年以降の沖底漁獲成績報告書から集計した太平洋北区のかげまわしの単位努力量当たりの漁獲量（CPUE）と、津軽海峡における1986年以降の三厩及び大間の底はえ縄のCPUEに対して一般化線形モデルによる標準化を行い、季節や海域等の影響を考慮した標準化CPUEを用いて、資源の水準と動向を判断した。1が平均値となるように標準化した際の2023年における標準化CPUEの値は、かげまわしでは0.53、底はえ縄では0.66となった。かげまわしと底はえ縄の標準化CPUEそれぞれにおいて、最大値から0の間で3等分し、上から高位、中位、低位とした場合、かげまわしと底はえ縄ともに直近年の標準化CPUEの値は中位水準にあることから、日本周辺におけるアブラツノザメの資源状態は現在中位水準にあると判断される。また、標準化CPUEの直近5年間の傾向から、かげまわしでは減少、底はえ縄では横ばいと判断されるが、本資源は長期的に変動を繰り返すことから動向の判断が難しく、引き続き注視していく必要がある。

管理方策

津軽海峡で操業を行う底はえ縄漁業者により小型魚の再放流及び漁獲量上限の設定等、資源保全に向けた自主的な取り組みが行われているが、公的な管理方策は実施されていない。なお、2007年のワシントン条約第14回締約国会議及び2010年の第15回締約国会議では、附属書IIへの掲載がEUから提案されたが採択されず、その後掲載提案は行われていない。2011年には、カナダのブリティッシュコロンビアにて操業を行うアブラツノザメ漁業が、サメを対象とする漁業としては世界で初めて Marine Stewardship Council (MSC) 認証を取得している。



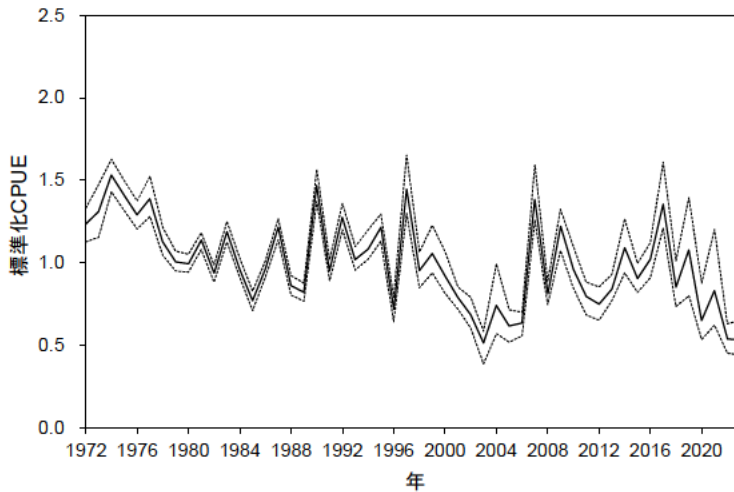
アブラツノザメ類の分布
 オレンジ色： *Squalus suckleyi*, ピンク色： *S. acanthias*



サメ類漁獲量から推定したアブラツノザメの漁獲量（1894～2023年）

| アブラツノザメ（日本周辺）の資源の現況（要約表） | |
|--------------------------|---|
| 世界の漁獲量 （最近5年間） | 調査中 |
| 我が国の漁獲量 （最近5年間） | 2,061～2,433 トン 最近（2023）年：2,061 トン 平均：2,216 トン（2019～2023 年） |
| 資源評価の方法 | かけまわし及び底はえ縄の標準化 CPUE により水準と動向を評価 |
| 資源の状態 （資源評価結果） | 1 が平均値となるように基準化した際の標準化 CPUE の値は、 かけまわしでは 0.53、底はえ縄では 0.66 標準化 CPUE を過去の最大値から 0 の間で 3 等分し、 上から高位、中位、低位とした場合、いずれの漁法でも資源の水準は中位、 動向はかけまわしでは減少、底はえ縄では横ばい |
| 管理目標 | 検討中 |
| 管理措置 | 検討中 |
| 管理機関・関係機関 | なし |
| 最新の資源評価年 | 2023 年（漁獲量・CPUE モニタリング） |
| 次回の資源評価年 | 未定 |

* 2023 年の漁獲量は暫定値を用いて推定



太平洋北区における沖底（かけまわし漁法）の標準化 CPUE（1972～2023 年）
標準化 CPUE は 1 が平均値となるように基準化、
破線はブートストラップ法で推定した 95%信頼区間の上限値と下限値。



津軽海峡内で操業を行う底はえ縄の標準化 CPUE（1986～2023 年）
1986～2012 年の三厩及び 2007～2023 年の大間の漁獲データを用いた。
標準化 CPUE は 1 が平均値となるように基準化、
破線はブートストラップ法で推定した 95%信頼区間の上限値と下限値。